

## 秋野豊さんの死を悼む

去る平成一〇年七月二〇日深夜、数カ月前まで我が学系の同僚であった秋野豊さんが、国連タジキスタン監視団（UNMOT）政務官として首都ドゥシャンベの東方ラビジャールで勤務中のところ、三名のUNMOT要員とともに銃撃され死亡する、という悲報に接した。本学復帰の手続きを進めようとしていた矢先のことであり、世話人として慟哭を禁じ得ず、大学もまた言葉のない日々が続いた。国連旗につつまれた無言の帰国後、学業の大半を過ごした札幌での密葬と「偲ぶ会」に引き続き、九月五日には東京国際フォーラムにおいて、外務省、国連、本学等の共催による「秋野豊さんを偲ぶ会」が小淵総理、高村外相等の列席のもとに挙行された。いずれも宗教色のない、心のこもった追悼会であった。同時に刊行された追悼文集には、「交わって、味わって、群れず」（九五五年の賀詞）という彼の信条に相応しく、一二〇名にも及ぶ内外の知人・友人が追悼記事を寄せ、一つ一つが印象的である。それから半年、彼の死の意味を冷静に考察するためには、なお日時が必要にも思われるが、改めて彼の足跡の一端をたどり、本誌の編者として、また同僚として追悼と惜別の辞を記すことをお許しいただきたい。

一九五〇年七月、スキーヤーとして知られた父・武夫の三男として小樽市に生まれる。小樽潮陵高校から同志社大学に進学するもなじめず、浪人生活の後、早稲田大学政治経済学部に入學、卒業後、さらに北海道大学法学部に學士入學する。七六年、同大学大学院法学研究科に進學、国際政治学を専攻し、七八年、博士後期課程に進み、中村研一教授、伊東孝之教授、木村汎教授らの指導を受ける。まもなくブリテイッシュユカウンスルの奨学金を得て、ロンドン

大学スラブ東欧学部に学ぶ。八一年に帰国し、北大法学部助手に採用され、法学部付属スラブ研究センター研究員を兼務し、八三年には論文「独ソ開戦とイギリスの対ソ政策」によって法学博士号を授与される。同年末からモスクワ日本大使館に専門調査員として出向し、ペレストロイカ前夜のソ連の内外政に身近に接し、研究上の関心は外交史から政治学的な手法による現状分析に移って行く。八五年末に帰国、北大助手に復帰し、翌年九月、本学社会科学系に講師として赴任した。八八年助教授に昇進し、本年四月、外務事務官となり、国連政務官に任命され、今回の惨事に遭遇する。

この間、研究活動の面では、ゴルバチョフ政権の「新思考」外交やエリツイン外交、ソ連・東欧における社会主義体制の崩壊要因と周辺地域に及ぼす影響について、度重なる現地調査や関係者とのインタビューに基づき、独自の分析を「世界週報」(時事通信社)等の国際問題専門誌や学術誌に精力的に発表し、単行本としても、『世界は大転回する』(平成二年)、『欧州新地図を読む』(平成三年)、『ゴルバチョフの二五〇〇日』(平成四年)等を集中的に刊行した。他方、内外のマスコミを通じて積極的に発言し、その内容は現状の動向解説のみならず政策上の提言にも及んだ。九二年から九四年にかけて、ニューヨークに本部をおく東西研究所の研究プロジェクトに参画し、プラハの同研究所欧州センターを拠点に活動するなかで、旧ソ連圏下の中央アジアにおける新たな国家体制(CIS)の形成を重点的な調査対象とし、また、地域紛争の調停者としての技術をも磨く。この間も旺盛な執筆活動は衰えることなく、現地情報を送りつづけ、手薄な当該地域の学術研究に貢献する一方、国連難民高等弁務官(UNHCR)の政策立案やわが国の中央アジア外交のあり方にも有益な示唆を与えた。学会活動の面では、平成八年一〇月より半年間、日本国際政治学会の事務局長代行を、また、ロシア・東欧学会理事も務めていた。殉職後の本年十一月、読売新聞社より、

紛争地域の調停者としての顕著な活躍と国際貢献に対し、「読売国際協力賞」が贈られた。

個人的な交流と感慨に触れることになるが、八九年年夏、第二次大戦勃発五〇周年国際会議に共同論文を発表することになり、昼夜をたがわず発表内容を詰めたことがある。その頃までの彼は、一片の外交文書が語りかける声に耳をそばだてる外交史家であった。しかし、間もなく東欧の激動が始まり、ロシア・東欧ウオッチャーとして活躍するようになるが、何のための歴史研究かを盛んに問いかけるようになった。誰のための歴史学であり、社会科学であるのか、あたかもソ連崩壊の現場にその答えを求めようとしていた。

崩壊と再生が同時進行する旧ソ連地域において、国家形成は如何になされるか、民族と国境の再編を導く力は何か、民主化と市場経済のメカニズムは如何に定着するか、地域としての結合の条件は何か、歴史の力は如何に作用するか等々、二〇世紀の社会科学が対象としてきた主要問題が凝縮されてそこに展開している——彼でなくとも研究対象として魅惑的な地域である。研究者としてならば資料が出揃い、情勢が落ち着いてからでも遅くはない、同僚としてそう感じていた。情報屋を自認してはいたが、社会科学のディシプリンを決して疎かにすることはなかったからだ。しかし彼はそれを待てなかったようである。

一つの理由は、将来とも恐らく記録には遺らないであろう「下から」国造りにかかわる人々の昔愼に満ちた営みが彼を誘い込んだのであろう、そして何よりも、日本は混沌のこの地域に、今何をなすべきかという政策的関心が常に念頭にあったからだと思う。例えば昨年、本学の共同研究（H・クラインシュミット他編『国際地域統合のフロンティア』彩流社）に寄稿した「中央アジアの地域空間」と題する一文がある。これは、C I S 諸国の混沌と秩序形成の可能性を多面的に論じたうえ、カスピ海の天然ガスを中央アジアを経て東アジアに還送するという雄大な「シルクロー

ド・オアシスベルト構想」を提案し、ユーロリージョン・レジームならぬユーロアジアリージョン・レジームの構築に向けた国際協力体制に日本が音頭をとるべきと説く。実際、意欲的な企業や政治家に呼びかけていた。タジク行きを決定させた心の葛藤を知る術はないが、日本の中央アジア政策のビジョン立案に某かの貢献を期していたことは疑いない。その意味では日本外交に殉じた死であつたと私は理解し、長く継承と吟味に値する構想の一つと思つてゐる。

秋野さんの死とその意味は、国際貢献の先導役として、あるいは日本の研究者にはめつたにない「学者の殉職」として、様々に語られている。いづれにせよ、混沌のユーラシア地域の秩序形成と平和の構築を見定めるまで、彼の行動はやむことはなかつたであろう。そして、この地域の苦悩の営みに共感し、地域紛争の調停者としての期待にも十分に応えられる骨太の研究者を育てることが当面の夢であつたように思われる。幸い、このような夢を託すに足る若い研究者が育ちつつあり、それを支える基盤づくりにも着手されつつあるが、一時の興奮に終わらないことを祈りたい。

平成十年十一月

社会科学系

波多野 澄 雄